

皆様、こんにちは。
府中教会、アンドレアです。

「恐れるな」という言葉が本日の福音の中には、三度も繰り返されます。宣教活動に向かう弟子たちの道は、安易で平坦なものではありません。かならずしも快く人びとが迎えてくれるものでもありません。現実には、むしろ逆に、冷たい無関心の中に迎えられる場合があります。無視され、拒絶され、人間の心の固さにぶつかり、はねかえされて疎外感と孤独に苦しむ時もあります。

また、宣教者たちの存在が、自分たちの和を壊し、分裂を与えるものとして人びとに受けとられる時もあります。長い伝統と習慣によって仲よく生きている社会に、宣教者たちは別の価値観を与え、その和をゆさぶることもあるからです。そのときは村全体、社会全体から拒絶され、排斥されることになります。

弟子たちの道は、苦難の道なのです。こうした現実直面して、人間としての弟子たちの心は当然、揺れ動くはずで、孤独感や疎外感に耐えられなくなって、与えられた使命を投げ捨てようかと思う時もあります。ですから、イエスは、弟子たちの心をかためようとするのです。勇気を与えようとするのです。

恐れる必要のない第一の理由、それは、「おおわれたもので、あらわれてこないものではなく、隠れているもので、知られてこないものはない」ということです。永遠の目で見ればつねに真理が勝利を得るのです。弟子たちは、これに希望をおいて、現実をのりこえるべきなのです。

恐れる必要のない第二の理由をイエスは指摘します。「からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」。地上の営みは滅んでも、神との深いつながりを切ることはできないのです。

第三の理由として、イエスは、神の摂理を指摘します。空を飛ぶすずめさえ、父のいつくしみ深い手の中にあるように、宣教者たち及び私たちの歩みはすべて神のいつくしみの中にあるのです。神様の大きな力につつまれ、守られているという堅い信仰こそ、彼らに及び私たちに勇気と希望を与えるのです。

